

## 「紀要」四十号を記念して

学長 島 崎 通 夫

本学の紀要が今号で四十号を迎えました。創刊は、短期大学開設の翌々年、つまり昭和二十七年でした。初期には年に二回刊行したことがあります。しかし編集の仕事を一年に二度担当することは、教員としては過重であったため、年刊として今日に到ったわけであります。

大学の存立は教員の研究活動に依拠することは当然のことながら、私立大学の宿命ともいうべき必ずしも十全ではない研究条件のもとで、本学の教員諸氏が各個にあるいは他機関との総合研究への参画などにより、一方、各種の研究助成費を獲得しつつ、旺盛に研究に携わり、多彩な業績を挙げて来られたことは各学界の識るところであり、本学の紀要も研究活動の一助たり得たことを思い同慶の至りであります。

今日の大学一般を見る時、教員は研究者としてのみ見るわけにはゆかず、広義の教育に多大の精力を注がねば大学の存立が不可能であるという現実のなかで、我々教員はそれぞれ力の配分に一種のジレンマを抱えているといえましょう。この傾向は特に短期大学教員の場合に著しいと思えますが、本学について言えば、女子の短期高等教育機関として社会の要請に充分に応えているのみならず、教員諸氏が研究面においても、それぞれの学界及び関連領域で活動貢献しておられることに對

し敬意を表するものであります。

現在、私立短期大学自体に対する研究関係の国庫補助としては「教育研究経常費」に限られており、私立大学研究設備整備費等補助金による助成からは除外されています。このこと自体が容認しがたいことでありますが私立短期大学協会としては現在補助対象とされている「研究装置等施設整備費補助金の教育装置」(三〇〇〇万円以上)の項につき、これを「五〇〇万円以上三〇〇〇万円未満」相当額の教育・研究用設備の導入補助にまで拡張されるよう、文部当局に毎年のように要請しています。この実現もかゝって、我々の側の研究体制の充実にあり、当局を首肯せしめるに足る材料を提出してゆくことが前提となると考えております。

今後に向けての我々の研究面での願いとしては、研究活動の場、条件をいっそう整備する意味で、本学将来計画の一項でもある然るべき研究機関の設置ということが考えられます。我々教員はそれぞれの専門領域で研究を進めているわけですが、研究対象、課題が細分化、個別化されてゆく一方において、いわゆる学際的研究が活発化してきたことにも必然性がある今日において、我々のこれまでの仕事のある範囲、ある課題のもとに相互に関連させることは不可能ではないと思われまます。こういう方向の仕事の成果は教育の面にもすくなくからざる寄与があるはずとおもいますし、我々の考える研究機関にそのような仕事が可能であるのではないのでしょうか。

(V) とまれ短期大学が多くの特で新しい局面に対して動かねばならぬ今、本学紀要の四十号の刊行を喜ぶとともに、我々の研究活動のさらなる発展を期待したいものであります。